



# ありがとう、土井たか子さん

辻元 清美 (前衆議院議員)



土井たかさんは、戦後政治の「護憲の錨(いかり)」のような方でした。私は、いつも土井さんに「歩く憲法九条ですね」と言いながら、土井さんの後をついて国会の中を、そして外国にもお供をしてきました。土井さんの背中が大きくて、戦争の体験と平和への思いを背負っているように見えま

た。私が初めて土井たか子さんにお会いしたのは、今から30年以上前です。代々木公園の反核運動の集会でした。核廃絶のTシャツにスラックス姿でさつそうとピアノを配る女性、大勢の人が行き交う中で、強烈な存在感を放っていた、その女性が土井たか子さんでした。私は、この女性が国会議員とは知らず、一緒にお昼ご飯を食べにくいことになったのです。そして、私の目の前に座ったのが土井さんと秘書の五島昌子さんでした。お二人とも、まるで市民運動の一員のような親しみやすさがありました。

「エッ、国会議員?」  
私はこの時、生まれて初めて国会議員と会ったのです。

私は、その後「過去の戦争を見つめ、未来の平和を創る」を合い言葉に「ピースボート」を立ち上げ、アジアから世界各地へと草の根の交流を展開していました。

土井さんとお会いして15年目の1996年秋、突然「市民活動をやってきたあなたに国会議員として活動してほしい」と要請を受けました。

「市民との絆」をスローガンに土井さんと一緒に無我夢中で厳しい選挙をたたかい、保坂展人さんと中川智子さんと私の3人が初当選を果たしました。私たちは「土井チルドレン」と呼ばれました。

国会議員としての初仕事は首班指名。当時は「自民・社民・さきがけ」の連立政権で自民党の橋本龍太郎総裁に投票しなければならぬのに、私たち「土井チルドレン」は「土井たか子」と投票しました。党議拘束を破って投票したので、与党内では大問題になり、党首の土井さんからも「党の決定に従わなければなりません」と注意を受けました。でも、その時の土井さんの顔はちよつと嬉しそうでした。

土井さんは、労働組合だけではなく市民運動やNPOの若者や女性とも連携していくことが日本の政治の再生に必要なだと、だれよりも認識していた政治家だったと思います。

2000年の衆議院選挙の時、私は土井さんとテレビCMを作ることにしました。広報委員長の私がつくったキャッチコピー「がんに平和・元気に福祉」を土井さんはとっても気に入ってくれて、そのコンセプトでCMも作るようになったのです。

「私、どなたでもでもするわよ」  
党首として選挙に臨む土井さんには

鬼気迫るものがありました。

そして、なんと、この時、土井さんはCMで『駄菓子屋のおばさん』に扮したのです。駄菓子屋の奥でテレビを見ている後ろ姿の土井さん。そこに子どもたちがやってきて食べかけのお菓子を交換して欲しいと「おばちゃん、これ変えてよ。変えてよ」とねだる。その時、土井さんが一瞬、後ろを振り向いてキッと子どもを睨んで「変えられないよ」と一言。この後、「変えられませぬ、憲法九条」と土井さんのナレーションで文字が流れる。

「あのおばさん、土井さんなの?」と衝撃的なCMで大反響。選挙も大きく議席を伸ばしました。

そして、この年のCM大賞に選ばれ、土井さんは駄菓子屋のおばさんに扮して授賞式に臨んだのです。

二人でCMを作ったのですが、「憲法九条の大切さを若い人にも伝えたい」「そんな土井さんの思いが『駄菓子屋のおばさん』にこもっていました。

史上初めての女性の「政党代表」、そして「衆議院議長」。土井さんは女性の政治家として道を切り拓いてくれたブルドーザーのような存在でした。「女性の政治家を増やさなければ」と参議院選挙の候補者を女性・男性・女性とクオータ制を真っ先に実現したのも土井さんでした。

全人生を政治に捧げなければこんなエネルギーは出てこないかと、近くでいつも思っていました。だから、どんな時でも「土井たか子」であらねばならない土井さんがかわいそうと感じることもありました。

毎年、私鉄関西西地連の大会が城崎温泉で開かれ、土井さんと秘書の五島さんと3人で参加していました。とっても素敵な温泉なのですが、土井さんはいつもひとり部屋の小さなお風呂に入っていました。

## 土井たか子さん お別れの会開かれる



11月25日、憲政記念会館で「土井たか子さん お別れの会」が開催された。福島みずほ社民党副党首の司会で始まった第1部では、衆・参議院議長、村山富市元首相、河野洋平元衆議院議長、落合恵子さん(作家)、佐高信さん(評論家)らがお別れの言葉を述べた。第2部では土井さんの生き生きとした政治活動を紹介したDVDの流れる中、市民の献花が行われた。900人近い方が花をささげて「おたかさん」の死を惜しみ、平和憲法の大切さをかみしめた。

おかみさんが「大浴場を貸切にしまから土井さんに温泉を楽しんでほしい」と言ってくれても「迷惑をかけるれない」とお断りしていました。裸で温泉につかっているときでも、握手を求められるような存在だから、自由がなかったように思っています。

リラックスしている顔を見たのは、好きな歌を歌っている時と「知恵を授かりたい」と、コレクションしているフクロウの素敵なブローチや小物を見つけた時くらいです。こんな時ははしゃいでいました。

私は土井さんと同じ赤坂の議員宿舎に住んでいましたので、国会でも宿舎でも、ずっと一緒でした。

ある年の大晦日、予算の資料を読みながら「議員宿舎で一人で寂しく年越しかな」と落ち込んでいたと、土井さんから突然電話がかかってきました。「清美さん、今、煮物を作ったから

食べにおいで。この仕事は益も暮れもないものなのよ」と。この煮物、薄味ですごく美味しかったのです。

「ダメなものダメ」という強さ、母のような優しさ、少女のようなかわいらしさ……すべて土井たか子さんの姿でした。

今、国会議事堂の前に立つと、国会の前に大きな岩山のように「土井たか子」という存在がどっしりとそびえているような気がします。そして「意見番」として、現在の危うい政治をにらみつけているように感じます。

11月21日、衆議院が解散され、総選挙は目前に迫っています。

「清美さん、選挙区に張り付きなさい。街頭でひとりでも多くの有権者に接しなさい」  
そんな土井さんの叱咤激励が聞こえています。

私たちを見守ってください。土井さん、ありがとう。